三澤煉乳所通い箱について

明治の終わりころ、山口県美爾(みね)郡には県種畜養成所が設立され、エアシャー・ホルスタイン種牛が飼育したことから、この地方は牧畜が盛んになりました。
大正元(1912)年美蒲郡西厚保村(現美祢市)に医師三澤孝が農家の牛乳を集めバターを製造しました。そして大正3(1910年)資本金21,000円で平釜式による煉乳所を設立して、金魚印の商標で煉乳の製造販売を行いました。
その後硲(はざま)文之進等が施設を作った鳴門村の組合の機械が休業中であったので大正6(1917)年4月に譲り受け、真空釜で製造をおこないました。
大工5年の原料乳価は全国平均1升12銭で、生産量は3889斤(1斤600g)であり全国に37ケ所ありました。 個人での経営規模は大きい方でした。
この通い箱は3代目三澤捷氏が保存されていたもので、我国の煉乳製造史の於いて極めて貴重のものであり、保存が大変よいと評価されています。 箱のサイズの外観は、縦53cm×幅58cm×高さ91cmで蓋はアール型の木製で、2重構造になっています。 このサイズからみると、人力で運ぶことは困難ですので、馬車か牛車で運んだものと思われます。
箱の表示をみると、CONDENSEDMEKの外にTOILETWASHINGPOWDERとあり、即ち煉乳と化粧石鹸と訳されますが、商品表示が英語で書かれているのも、当時モダンの最先端の表示であり、絵柄もこの時代を偲ぶことが出来ます。
発売元江本亀太郎は、三沢家と親戚の小野田で代々続く造り酒屋で、明治維新後小野田セメント(株)の発起人の一人で、小野田の豪商でしたので強い販売網をもっていたことが解ります。

此の貴重の通箱を和仁皓明先生が発見したもので、この取扱方法の相談が当研究会にあり、その結果公益財団法人中田俊男記念財団牛乳博物館に末永く保管を依頼することにしました。